

彼岸花 ver2.0

劇團冒險列車旗揚公演

『彼岸花』

作

近藤勝斗

☆ 戯曲『ヒガンバナ』最終稿 (ver.2.0)

タイトル .. 戯曲『ヒガンバナ』最終稿 (ver.2.0)
（応募フォーマットに準拠）

タイトル .. 彼岸花

作者名 .. 近藤 勝斗

上演時間 .. 約 60 分

構成 .. 全 6 場

登場人物 ..

- ・市川 次郎（死刑囚／無差別通り魔殺人の容疑者）
- ・森 圭吾（死刑囚／妻殺しの容疑者）
- ・後藤 雅人（刑務官）

『ヒガンバナ』あらすじ

死刑制度をめぐる議論が揺れる現代の日本。無差別殺人の容疑で死刑を宣告された男・市川次郎と、妻を殺害した容疑で収監された男・森圭吾。ふたりは刑務所の隣り合つた独房で会話を交わす。沈黙と会話のあいだで、ふたりの過去と心の闇が徐々に明らかになっていく。死刑執行の日が迫る中、彼らの語らいは「正義とは何か」「罪とは何か」「人は赦されるべきか」という問いへと突き進む。現実と幻想の狭間で揺れるふたりの運命。そして、最後に裁くのは誰か。「隣り合う独房。交わる過去。問われる“正義”。」—現代日本を舞台に描く、極限の対話劇。

第一場 「光と檻」

○ 独房 昼

照明…ごく狭い円形スポット。舞台中央。無機質な壁と、鉄格子。箱馬ボックス2つが檻の左右に置かれている。無音。

森
静寂。

暗転ののち、ゆっくりと明転。森圭吾が箱馬の上にうずくまっている。手は膝の間、背中を丸めて、長い時間、何もせず

に座っている。

時間が流れる。何かが始まるのを待っているかのような静

寂。隣の檻から声。

市川の声 「……今日も、朝が来たな」

森、動かない。何も言わない。

市川の声 「黙つてると、耳が騒がしい。……耳鳴りじゃない。音が、押し寄せてくるような。外の音。人の声。車の音。風。子ども の泣き声。……全部、俺の頭ん中で鳴っている。だけどここには……なにもない。何もないのに、死んだ人間の声が、過去の断片が、奪つた命の叫びが、押し寄せてくる……聞こえてるか？」

森、ゆっくりと顔をあげる。無表情

森
「……誰だ」

市川 「お隣さんだよ。昨日から、こっちに來た」

森、立ち上がり格子に近づく。隣の檻は暗がりの奥にあり、市川の姿は見えない。

森「……いたのか、昨日も」

市川「いたさ。ずっと黙ってただけさ。おまえの寝言がうるさくて、疲れなかつたよ」

森「見てたのか？」

市川「見てはいない。聞こえただけだ。夢でも見てたんだろう？ どん

な夢だつた」

森、沈黙。目を閉じる。

森「——踏切の音が聞こえた。赤いランプが点滅していた。風が吹いていた。……あの日のことを、何度も何度も繰り返して、見る」

市川「……わかるよ。音つてのは呪いだよな。忘れないのに、頭の

片隅に残り続ける」

長い沈黙

森「……あなたは、何をしてここに」

市川「人を殺した。駅の構内で。名前も年齢も、知らないやつばかりだった。俺が殺した。……でもな、本当は何人か、生きてしまつたらしい」

森、顔をしかめる

森「……わからないな。理由は」

市川 「さあな。……ただ、あの時何もかも止めたくて。電車の音も、ホームのざわめきも、すべてが遠く、静かで、白かった。あのとき、世界は透明になつたんだ。時間も色も、重さもなくなつて、ただ一つ、俺の鼓動だけが響いていた。誰かが叫んでいた。誰かが倒れていた。でも俺は、ただそれを眺めていた。こんなにも、綺麗な地獄があるのかと心から、そう思つたよ」

沈黙

森 「あんたは——救世主か？」

照明、森の顔だけを浮かび上がらせる。

市川 「はは。救世主か、違うさ。俺は……ただの人殺しだ」

間

市川 「そういうお前は何をしたんだ」

森 「……俺は……」

市川 「まあいい。理由は何であれどうだつていい」

森 「あんた、名前は」

市川 「市川でいい」

森 「……あんたを知つてる気がする」

市川 「だろうな。新聞やテレビで随分騒がれた。でもそれも、もう

昔の話だ」

沈黙

市川 「お前の名前は」

森 「……森。 森圭吾」

市川 「森圭吾……いい名前だな」

静寂

照明がゆっくりと暗転に向かう

音楽

完全暗転

——第一場・了

第二場 「記憶の綻び」

○ 独房 夜

照明・森の檻のみスポット。市川の檻は暗い。無音。

森、箱馬に座り、何かを数えているような手の動き。

森「誰かの目があるわけじゃない。あの頃のことを思い出そうとする
と、指先が先に動く。ただ、習慣だけが俺を動かす。カレンダー
をなぞるように……月日を数える。あの日から——三年。毎朝、同じ
じ時間にミルクを温めて。身体を拭いて。排泄物を拭き取つて。生
きてるのか、死んでるのかもわからない彼女のその顔を、毎日、見
る。指先は、昨日と同じ動きを繰り返す。止まれば壊れる。だか
ら、止まらないようにしていた。俺は……俺は、あの時、何を望ん
でいた……」

暗がりの向こうから声。

市川の声「終わりを望んでたんだろ。お前が求めたのは、終わり
だ」

森、顔を上げる。

森「……また、あんたか」

市川の檻が明るくなる。

市川「話の続きをするとしよう。お前は自分が悪いとは思っていない
んだろう？」

森 「そんなことは——言つていない。ただ、あれは……選ばされたんだ。誰も彼女を助けてくれなかつた。医者も、親族も、行政も……」

市川 「じゃあお前は、誰に裁かれたんだ。お前の“選ばされた”つ

て言葉、便利だよな。誰も彼女を助けなかつた、だから殺した。

……お前はただ、逃げたかつただけじゃないのか？」

森 「……あなたに、俺のなにがわかる」

森、うなだれる。

森 「あの時、雨が降つていた。遮断機の音が鳴つていた。音が消えた。それだけだ……彼女はもう、ほとんど目を開けなかつた。ただ、わずかにまぶたが動いた。俺は……見たんだ。声にならない拒否しているような感覚が、そこにあつた気がした。けれど……もう、戻れなかつた。あれは、彼女の意思だつたのか？それとも俺の幻だつたのか？」

しばし沈黙

市川 「じゃあ、俺と変わらないな」

森 「あんたとは……違う。無差別に、意味なく——」

市川 「じゃあ、お前が殺したのが彼女じゃなかつたら？例えば、誰かの母親だつたら。子どもだつたら。それでも……正義は、お前にあるのか？ならお前の正義を、俺が代わりに語つてやろうか？」

森、言葉を失う。

市川 「正義……正義ってなんだ。誰かが決めるのか？法律か？世論か？神か？それとも——お前か。人はみんな、自分の罪を忘れるためめに、『悪』を創るんだ」

沈黙

森 「あんた……どうしてそんなことが言える」

市川 「……お前が求めたからだ」

森 「……俺の罪はなんなんだ……」

市川 「罪ってのは、他人が押しつけてくる言葉じやない。お前が、自分の中に掘っていくしかない。深く、深く、自分でも目を背けたくなるほどの場所まで、潜らなきやな。“彼女がそれを望んだ”

と、お前は何度も自分に言つたんだろう？それ、本当に彼女の声だつたか？」

森 「あの日のことを思い出そうとすればするほど、彼女が何かを言つてた気がするんだ。ここにいるよ……もういいよつて」

市川 「それは……お前の中の声だ。お前が彼女の口を借りて自分に言わせてるんだ。「もう終わらせろ」ってな」

森 「俺は……」

暗がりから、後藤の影が一瞬だけ浮かび上がる。

何も言わず、ゆっくりと二人の間を歩く。

後藤は市川の檻に目を向けるが、観客には市川の姿は見えない。森はそれを見つめる。

後藤、立ち止まる。目だけで森を見る。何も言わず、去っていく。

市川「……お前が見ているのは彼女じゃない。お前がずっと見ているのは——罪を犯した自分の姿だ」

森、再び自分の膝に顔をうずめる

暗転

——第二場・了

第三場 「告白」

○ 独房 深夜

照明：中央に市川の檻のみスポット。森は暗がり。

市川、無言で佇む。静寂

やがて森の檻にうつすら明かりが入る

森「誰にも話していないことがある。誰にも話せなかつた。言葉にした瞬間、全部が嘘になる気がして……。でも、黙っていても、俺の中でその瞬間は繰り返される。何度も、何度も……」

市川（低く）「言つてみろ。口にすれば、少しほ軽くなる」
森「……あの日のこと……あれは事故だつたんだ」

市川「じゃあなぜ、お前はここにいる？」

間

森「……あんたは、本当に人を殺したのか。本当は、間違いなんじやないか。話せば話すほど、あんたは……人を殺した顔をしていい」
市川「間違いだと？ お前は自分の罪を軽くするために、俺を聖人に仕立てたいのか」

森「……違う。俺は……俺はただ……」

市川「いいか。俺は、殺した。七人。男も女も、関係ない。理由なんてない。ただ、そこにいたからだ。それだけのことだ」

森、息を呑む。

市川 「最初の一人は、小学生だった。ランドセルの黄色いカバーが
やけに目に入つて、気づいたら、手に包丁を持ってた……そのまま
は、俺を映してた。誰よりもはつきりと。大きく見開いて、何も言
葉を発せずに倒れた」

森 「やめろ……」

市川 「二人目は、年寄り。道に迷っていた。俺は後ろから、ゆっくり
近づいて首の後ろを一差し。ゆっくり沈んでいき、崩れるつて感
じじゃない、落ちるつて感覚だつた」

森 「……聞きたくない」

市川 「次は主婦。スーパーの帰りだった。買い物袋が破れ、トマト
が転がつた。刺した時俺の手の中がぬるつとしたよ。熱かった。そ
の女の叫び声はとても良かつたな」

森 「ふざけるな！！それがお前の正義なのか！？意味もなく、誰彼
構わず殺して、それで何か変わったのか！？何か救われたの
か！？」

市川 「変わらなかつたさ！だからやり続けた。でもな。殺してる時
だけ、俺はこの世界の中にいたんだ。誰にも気づかれなかつた俺が
……世界を引き裂く存在になれた」

森 「あなたはただの化け物だ」

市川 「それが本当なら……お前は、どうなる？お前の正義は人を救つたのか……あるいは、自分を正当化するための飾りなんじやないか？何だ。愛していたからか？苦しかったからか？それとも、世間が悪いのか？どこまでが本当なんだ？——」

森「黙れ！」

沈黙

森 「……あれは事故なんだ。もう限界だつたつて、誰も助けてくれなかつたつて、彼女を救いたかつたと、それを盾にしたかつただけなのかもしれない。それが俺の……せめてもの、正義だつた。信じたかつた。誰かに……そう言つてほしかつたんだ」

静寂

市川 「それがお前の罪だ」

後藤、舞台袖から無言で現れ、二人の中央を通る。市川を見

ない。森も見ない。

照明、後藤の足元だけを照らす

後藤、静かに檻の前に立ち止まる

森、ゆっくりと顔を上げる

後藤、何も言わず去る

森 「あの日と同じ音がする。あの鉄の軋む音。遮断機の警報。雨の

匂い」

遠くで踏切の音がなる。ごく小さく、観客の脳裏に浮かぶ程

度

照明、ゆっくり暗転

——第三場・了

第四場 「影法師」

○ 独房 昼（雨）

照明・森の檻と市川の檻、両方に薄明かり。光は冷たく、白い。

市川、座つたまま。森、立つたまま。互いに目を合わせていない。

空気が張り詰めている。どこか“終わり”の気配が満ちている。

市川「なあ森、ひとつ訊いてもいいか？」

森「……なにを」

市川「お前は、後悔してるのか？」

森「……」

市川「いや、違うな。お前は、正義を信じていたか」

森「……かつては。……そう思っていた。あの時、彼女の延命装置を外すかどうか——そんな選択肢は、俺には与えられなかつた」

市川「その正義を、誰が認めた？」

森「誰も認めなかつた。自分自身でさえ、今も認めていないのかもしれない」

市川「それでも、俺よりマシだと？お前は、光の中にいると信じていたか？お前は、まだ許されたいと思ってるんじゃないかな」

森 「許されたいと思ったことは、一度もない。だが、お前にだけは言える」

静かに市川を見る

森 「お前は、正義とは正反対だ」

沈黙。光がほんの一瞬だけ赤く揺れる。

市川 「俺は、ずっと光の外にいた。誰からも照らされない場所に。望んでそこにいたのか？それとも追いやられたのか？今となつては、どうでもいい」

問

市川 「お前は、俺に似ている」

森 「違う。俺たちは、似ていない」

市川 「違うと言うたびに……お前は俺に似ていく」

森 「俺は……あのとき、彼女の瞼が動いた気がした。止められたのかもしれない。けれど俺は、止まらなかつた。彼女のためだと、信じたかつた。だけど……もしかすると——あれは俺のためだつたんじゃない。俺が、苦しみから逃れたかつただけなんじやないか……それを“正義”という名前で、包んだだけなんじやないか

……」

市川 「ようやく気付いたな。お前が殺したのは、彼女じゃない。

“正義”って言葉そのものだ」

市川、ゆっくりと立ち上がる。檻の外へ歩き出すように見え
るが、舞台上に柵はない。

市川「やはり、俺たちは似ていて。どこまでが俺で、どこからがお
前か……」

森、顔を伏せる。市川、ゆっくりと舞台上を歩く

市川「闇はいつも静かで、優しい。名前も、時間も、意味も、流れ
ていく。人は、影の中でこそ真実を見つけるんだ。光は、あまりに
残酷だ」

沈黙

市川「じゃあな、また会おう。光の届かない場所で。名前も顔もな
いまま、俺はお前の影に紛れている……」

照明が市川からスッと抜け、影だけが残る。まるで霧のよう
にその姿が消えていく。

森、一人きりになる。観客には、檻の中に彼一人しか見えな

い。照明、森の檻だけに残る。静寂

——第四場・了

第五場 「執行前夜」

○ 独房 夜

照明…森の檻のみスポット。完全に一人きり。静けさのか、僅かな虫の声が遠くに。

森、座っている。紙とペンが一つ、手元に置かれている。

森「獄中では、手紙を書くことが許される。遺族宛でも、親族宛でも、誰宛でも構わない」

間

森「だけど、俺は今、誰に宛てていいのか分からぬ。あの人はもう、返事をくれない」

森、ペンを取り、書こうとするが止まる。数秒沈黙

暗がりから、後藤が静かに現れる。足音はしない。森の前に

立ち止まる

後藤「……森さん、希望する食事はありますか

ペンを置き、後藤を見る

森「……あります。缶詰の桃」

後藤「……分かりました」

後藤、うなずき、何も言わずに去っていく

森、一人になる

森 「あれは、彼女が事故に遭う前、最後に俺が食べさせたものだつた。甘い桃の匂いと、あのときの光……それが今も、残っている。スプーン一杯で、笑った。声は出なかつたけど、確かに笑つていた。もしも、もう一度彼女に会えるなら、「ごめん」と言うよりもう一度、あの桃を食べさせてあげたい」

照明、徐々に暗くなる

市川が静かに歩いてくる

森 「…お前は」

市川 「静かない夜だな」

森 「これは……現実なのか？」

市川 「お前がそう思えば、そうだ。ただ一つ確かなのは、今この瞬間……お前は俺と話してる」

森 「俺はもうわかつたんだ。自分が何者で、どんな罪を犯したのか。あれは正義なんかじやなかつた。優しさでもなかつた。俺は：…ただ、解放されたかつたんだ」

市川 「ほお……それで、どうなる？」

森 「俺は人間として死ぬ」

市川 「そうか……」

森 「お前がいなければ、俺は、ただの“被害者”でいたんだ。けれど、お前がいたから、俺は人間になれたのかもしれない。俺は

俺のままで死ぬ。誰の影でもない、ましてやお前でもない。俺は、
俺だ」

市川「はは……それでいい。それが、お前の選んだ終わりなら……
影が消えるとき、人はようやく、自分の輪郭を思い出す。光の中で
見えなくなるものが、闇の中にはつきりと立ち上がることもある。
……もう、俺はいらないな。さよならだ。森圭吾」

沈黙

市川、闇の中へ消えていく。森だけが残る

——第五場・了

第六場 「ヒガンバナ」

○ 回想 踏切【夜・雨】

暗転の中、音もなく静寂が支配する。踏切の警報音が遠くから鳴り始める。

徐々に照明。檻の中、森が立っている。顔は無表情。真っ白な光が彼を包む。

照明・踏切の光のように赤く点滅しながら、舞台奥へ浮かび上がる〈過去の風景〉

そこは、あの踏切。

舞台の隅に箱馬を用いて段差が作られ、森と“妻”がいる——人形か、あるいは無言の俳優。顔は見えない。車椅子に座つている。

妻は動かない。森、泣いているのか、笑っているのか、曖昧な表情。

森 「さあ、着いたよ。僕らはここで出会った……覚えてるかい。君は向かいにいた、僕にそつと微笑んだ。あの時から僕は君のことを愛してた。これまでもずっとそばにいた。そしてこれからも……僕は君を離さないよ。君との思い出は数えきれないくらいあるね。結婚して2年目だつたかな、一緒にヒガンバナがたくさん咲いてると

ころに行つたよね。凄くきれいだつたよね……また見に行きたいたな

……絶対に行こうね。……さあ、靴を履いて」

森、妻に靴を片方から丁寧に履かせる。

森 「……ほら、ちゃんと履けたよ。あとは、一步だけでいい。君が歩けなくとも、僕が押す。どこへでも行ける。だから……大丈夫だよ。君の代わりに、僕が全部覚えてる。咲いていた花の色も、風の匂いも、君の髪の感触も……ぜんぶ、忘れてないよ」

しばらく沈黙。

森 「なあ、恵梨。……何か言つておくれよ……もう一度愛してると言つてくれよ。もう一度だけ僕の名前を呼んでおくれよ……お願ひだ、もう一度だけでいいから、笑つてくれよ。頼むよ……お願ひだ

……恵梨」

森、妻を抱きしめる

森 「ごめんな。……ごめんな」

踏切音。電車の音が近づいてくる。照明が赤く激しく明滅し、緊張感が極まる。

音、光、止まる。

照明、白一色に。

檻の中の森が現代に戻る。白い光の中、後藤が静かに現れ、

森の前に立つ

後藤 「森さん、森圭吾さん。時間です、眠れましたか」

森 「ええ、こんなに静かな朝は久しぶりです。夢を見てた気がします。……けど、夢ってのは、起きたときには忘れてしまいます。今日はいい日ですね。とても暖かい」

後藤 「……そうですね」

森 「彼岸花という花をご存知ですか、ヒガンバナには毒があるそうです。けれど、土の中では、虫を避け、自分の身を守つてるらしいんです」

微笑む。

森 「……皮肉なもんですよね」

沈黙

後藤 「ヒガンバナは綺麗な花ですよ……私は好きです」

森 「……ありがとうございました」

後藤、微かに頷き、森に背を向けて歩き出す。森もゆっくり

後を追う。

森 「後藤さん。……前にここにいた人、覚えてますか？隣の奴で

す」

後藤 「……ああ。覚えています」

森 「彼は……生きてますか？」

間

後藤 「もう、 いませんよ」

沈黙

森（市川） 「死刑とは、 社会が定めた“終わり”なのか。 私にとつての終わりは、 あの踏切の中に、 もう置いてきた」

森、 舞台中央に立ち止まる。 上から赤い光が一筋、 彼を照らす。 花のように。 照明、 ふっと消える。 完全な暗転。

数秒の沈黙のあと、 遠くから「Here, s to You」のインントロが微かに流れる。

後藤、 森を連れてやつてくる。 森の顔に布を被せる。
音量は小さく、 観客に“余韻”として届く程度。

——終幕——